地域学講義２

柳原 邦光

Lecture on Regional Sciences: Part II

YANAGIHARA Kunimitsu

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第15巻　第2号　抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.15 / No.2

平成31年 3月 20日発行　　March 20, 2019

地域学講義２

柳原邦光*

Lecture on Regional Sciences: Part II

YANAGIHARA Kunimitsu*

キーワード：わたし、いのち、生の充実、日常生活、自然、関係性
Key Words: self, life, a satisfying life, daily life, nature, relationship

Ⅰ．はじめに

2018 年度の「地域学入門」（地域学部 1 年生必修科目）は「第 1 部 地域学部の研究と活動」、「第 2 部 地域で生きるということ」というテーマで行われた。「地域学総説」（3 年生必修科目）の場合は、全体テーマを「『私』と『地域学』」と設定して 3 部構成で実施された。「第 1 部 地域学のフィロソフィー」、「第 2 部 生きられる地域学」、「第 3 部 『私』と『地域学』」である。

筆者は「地域学入門」では初回に 40 分間、「地域学総説」では最終回の第 15 回に 85 分間講義した。タイトルはよく似ている。「〈私〉から地域学へ」と「『私』と『地域学』」である。「入門」は、大学に入学したばかりの学生のための講義なので、難しい話にならないよう心がけた。3 年生にはそのような配慮は必要なかったが、地域学は誰にでも理解できることが重要なので、学術的な言葉を使わないで、できるだけ平易な表現に努めた。このほか工夫したのは、どちらの授業でも前年度に行った筆者の講義原稿を講義前か後に読むよう求めたことである（学部ホームページ公開の学部紀要『地域学論集』で読むことができる）。そうすることで 2018 年度講義に盛り込めない内容を補ったのである。

2 つの講義はともに〈私〉から地域学を語ったので、本稿では 2 つを合せて「地域学講義 2」として筆者の現時点での地域学理解を示すことにした。どちらも講義原稿そのままである。講義原稿を公開するのは 2 つの授業が筆者にとって「地域学を創る」場になっており、そのプロセスを示すことに意味があると考えたからである[1]。

講義原稿のほかに、〈私〉から地域学を語る理由を含めて、筆者の「地域学を創る」基本的なスタンスを明示して結びとしたい。

Ⅱ．〈私〉から地域学へ

はじめに

こんにちは。柳原邦光です。よろしくお願いします。この「地域学入門」は地域学の基礎を学ぶ授業ですが、今日は初回ですので、地域学のもっとも基本的なところをわかりやすく紹介したいと思います。とはいえ、これはなかなか難しい課題です。それで講義の準備をするにあたって、昨年度の講義原稿を読み返してみました。昨年もできるだけわかりやすく語ったつもりですが、大学に入ったばかりの 1 年生にはすぐには理解できないと思われるところが少なからずありました。しかしながら、皆さんに伝えるべき最小限の内容ですので、削るわけにはいきません。ということで昨年度の原稿を配布して、今日これからお話しすることを手掛かりにして、次の授業までにゆっくり読んでいただくことにしました。原稿のコピーはすでに皆さんのお手元にありますね。タイトルは「なぜ、今、地域なのか」です。なぜ「地域」に着目するのか、なぜ地域学が必要なのか、背景に何があるのか、書いています。

今年度は、違った角度から話をします。タイトルは「〈私〉から地域学へ」です。「〈私〉から」としたのは、私自身が地域学に深く関わるようになった経緯を紹介して、どのような理解に至ったかを知って

＊鳥取大学地域学部地域学科

[1] 講義内容の多くは、これまで『地域学論集』に掲載した筆者の論考から引いてきたものである。そのため内容と文章に重複があることをあらかじめお断りしておく。

いただきたいたいからです。もう１つ、「〈私〉から」考えることは自分自身を知ることになるからです。さらに地域や地域学を考える確かな方法だからです。「〈私〉の〈今、ここ〉」から「生活」を中心に考えることで、「なぜ地域が重要なのか、地域学が必要なのか」理解しやすくなると思います。今回は詳しいレジュメを作成しませんでした。お手元にあるのはメモ用紙だと思って使ってください。

１．私の地域学への軌跡

それでは私が 1993 年に鳥取大学に来たところから始めましょう。当時は教育学部で、私は教員養成課程中学校社会科に西洋史の教員として赴任しました。担当したのは「西洋史総説」と「歴史学研究法」という講義でした。私の専門はフランス史ですので、２つとも頑張ればなんとかなる講義です。しかも、当時の社会科の先生方は「柳原さん、自由にやってくださいよ」といってくださったので、「これはいいところに来た」と大変喜びました。

しかし、そんないいことばかり続くはずがありません。1999 年に教育学部が「教育地域科学部」に改組されたのです。「教育」と「地域科学」の２つからなる複合学部ということで、私は地域科学の教員になりました。こうして呑気に歴史の研究と講義をしていればいい時期は、実にあっけなく終わりました。さらに大変ショックなことが起こりました。当時の学部執行部の方が私の研究室に来られて「これからは歴史だけでなく地域も研究してください」といわれたのです。これには驚きました。「フランス史の教員が地域を研究する？どうしてそんなことをしなければならないのか」と、非常に強い反発を感じました。それは私が求めて歩んできたのとは真反対の方向だったからです。

私は島根県の大田市で生まれ育ちました。山奥の小さな町で、みんな顔見知りでした。特別嫌なことを経験したわけではないのですが、何となく息苦しさを感じていました。それで大学進学先として大阪を選びました。もちろん都会への憧れがありましたが、山の中の狭い町を出て、もう少し大きな世界で暮らしたいという気持ちもありました。たとえば、私の集落では、空を見上げると、ぐるっと山の縁に囲まれています。空が額縁に入っているようなものです。山に登れば自分の町を一望できます。山と山の間の狭いところに住んでいることが一目でわかります。私はこの「狭さ」が嫌で、広いところで自由に暮らしたかったのです。ですから、生まれ育った町を何のためらいもなく離れたのです。大学では、最初に法学部、次に文学部、さらに大学院と進んで、結局、日本を飛び越えてフランスの歴史を研究して今に至っています。

そういうわけで地域を研究するよういわれたとき、「狭い地域に戻れというのか」と反発したのです。当時の私にとって、「地域」は人の行動や考え方・感じ方を制約する、疎ましいもの、わずらわしいものでしかありませんでした。

悪いことはさらに続きます。地域科学には地域政策課程と地域科学課程があり、２つの課程の１年生必修科目として「地域研究論序説」がありました。今の「地域学入門」のような科目です。受講生は 60 名でした。その授業プランの作成から授業進行まで、他の３名の教員とともに担当することになったのです。これには頭を抱えてしまいました。私の専門はフランス革命史で、キリスト教を根絶して新たに革命礼拝を打ち立てようとした現象（非キリスト教化運動）を研究していましたので、「地域」について基本的な知識も興味もなかったからです。まったく専門外のことで、とんでもないことになってしまいました。

「地域研究論序説」ではテレビ局が取材に来たことがありました。授業の様子が夕方のニュースで放送され、「熱心に聴講する住民の姿」がアップで映し出されました。それは私でした。「教員です」といいたいところですが、画面に映っていたのは、学生と同じように、懸命にノートを取り、吸収しようとする姿でした。カメラマンが勘違いするはずです。これが私の地域学の始まりでした。

毎回の講義はそれなりに内容のあるものでしたが、「序説」という授業全体で判断すると、ただのオムニバスの授業で、失敗だったと思います。「序説」は 5 年間やりました。教員として責任を果たすことができなかったという苦い記憶しか残っていません。学生には「申し訳ない」と今も思います。

教育地域科学部は 2004 年に再び改組されて地域学部になりました。私は「地域研究論序説」から解放されてほっとしましたが、それも短い間にすぎませんでした。「地域学入門」と「地域学総説」が新設され、2006 年度から担当することになったのです。「地域学総説」には参りました。「地域研究論序説」でさえ大苦戦したのに、さらにレベルの高い科目をつくるとはいったい何を考えているのか、と呆れてしまいました。しかも受講生は 190 名です。全く見通しがなかったのですが、もうやるしかありません。私は覚悟を決めました。

スタートするにあたって「地域研究論序説」が失

敗した原因を考えてみました。最も大きな問題は「根本的な問い」がなかったことです。地域を根本から考えるという発想がありませんでした。また、地域学について語ることのできる教員がわずかしかいませんでした。当然ですね。元々が教育学部なのですから。ただ幸いなことに、地域学部になるとき、新たに教員を迎えることができました。これは大きかったですね。おかげで専門の教員が足りないという問題は少し改善されました。

そうすると、残った問題は「どのような問いを立てるか」です。私自身は、率直に現状を認めることにしました。私は「地域」にネガティヴなものしか感じていませんでした。歴史学の研究を脇に置いて研究する意義があるとは、正直、思えませんでした。それでも地域について研究教育しなければなりません。これが私に求められていることです。そうなると、「問い」は明らかです。「地域は研究教育するに値するのか」「なぜ、今、地域なのか」です。おわかりですね。これは昨年度の地域学入門で私が行った講義のタイトルです。私は 2006 年からずっとこの問いを抱えてきたのです。これは私にとって切実な問いなのです。

結果的に、これまで私は自分でも呆れるほど地域学関係の文章をたくさん書いてきました。このように地域学に深入りするようになったのには、いくつか理由があります。その１つが松場登美さんとの出会いです。松場さんは群言堂という服飾ブランドを経営する服飾デザイナーで、「地域学総説」で２回講演をしていただきました。このときの講演が私にとって地域と地域学を考える上で大きな転機になりました。

松場さんは島根県大田市大森町という田舎の町に住んでおられるのですが、今では世界遺産となり、「石見銀山」として知られています。私の実家は大森町から 10 キロほど山奥に入ったところにあります。大森町には小学校の頃から遠足でよく行きました。普段の生活でも行くことがありましたので、知らない町ではありません。私の記憶にある大森町は、戦国時代以来の歴史があるとはいえ、とても寂れた町でした。

結婚して帰省したとき、史跡ということで妻と大森町に行きました。すると、町の空気がなんとなく変わっていました。「ブラハウス」という、古民家に手を入れたお店ができていて、そこを中心にとてもいい感じになっていました。その後、訪れる度に町は心地よさを増していきました。あるとき朝日新聞で松場さんの特集記事を見つけました。お店の名前は「群言堂」に変わっていましたが、松場さんご夫妻が中心の１つになって町の雰囲気が変わったとありました。ご夫妻のお考えも紹介されていました。なるほどと納得して、講演をお願いしたのです。

講演は衝撃的でした。同じ大森町を見ているにもかかわらず、見え方がまるで違いました。私は田舎が嫌で都会に出ました。大森町を見ても寂しさしか感じませんでした。ところが、松場さんは、大森町を自分の居場所として、大森町での暮らしから大きなエネルギーと心の充実を得ているようなのです。

この点をみなさんに理解していただくために、松場さんの言葉を紹介しましょう。松場さんは『群言堂の根のある暮らし―しあわせな田舎 石見銀山から―』（家の光協会、2009 年）という著書の冒頭で次のように語っています。

> 山の中腹から眼下を見下ろすと、緑深い山あいに赤茶色の瓦屋根がきらめく集落を一望することができます。四方を山に囲まれた、まるですり鉢の底のような小さな町。この場所に身をおくと、自分が今ここに生きていることをひしひしと感じ、気力が湧いてくるのです。ここが私の居場所。大丈夫、ここでならやっていける。（2 頁）

これは私とは真逆の受け止め方です。私が寂しさしか感じないところで、松場さんは「根のある暮らし」を見出し、楽しんでいるのです。ショックでしたが、講演が終わった後、暖かい気持ちになっていることに気がつきました。学生たちもそんな感じでした。みんな感動していたのです。私は考え込んでしまいました。「私には重要な何かが見えていない」、そう思わざるを得ませんでした。この気づきは私が中学校の頃から抱いていた悩みに射してきた一筋の光のようでもありました。

それ以来、自分自身の心に素直に向き合い、私自身の原点である、かつての暮らしを思い起こしながら、考えるようになりました。そうすると、不思議なことに、忘れていた記憶が鮮やかに蘇ってきました。自分で抑え込んでいたのかもしれません。今では、地域や地域学を含めて、物事を深く考えようとするとき、かつての暮らしの記憶に照らして検討するようになりました。脱け出してきたはずの農村での暮らしが私の確かなモノサシになったのです。

現在の心境を少しだけ紹介します。私の家は農家で、父親の代まで米を作っていましたが、父が亡くなった今では、田んぼは荒れて、草だけでなく大きな雑木まで生えています。自然に戻ってしまったの

です。そうなった責任は農業を拒否した私にあるのですが、長い間、その自覚がありませんでした。父が田んぼをつくるのをやめるといったとき、気楽に「もう無理をしない方がいいね」と言葉を返しただけです。父はどんなに悲しんだことでしょうか。それを思いやることもありませんでした。

最近では、荒れ果ててしまったかつての田んぼを見ると、みんなで農作業をした往時の光景が見えるような気がします。作業の手を休めておにぎりを頬張ったこともありました。そのときのことを思うと、不思議な気がします。私は自分が何もしなくても、あの美しい風景が永遠に続くかのように思っていました。愚かなことです。今では申し訳ないと思います。

それは祖父母や父母に対してだけではありません。この田んぼでどれくらいの家族が命をつないできたことか、何百年も続いたに違いない営みを自分が終わらせてしまった、そう思うと悲しく、詫びたい気持ちになるのです。もちろん、その一方で、何であれ生活の上で必要がなくなれば失われていくものだという気持ちもあります。なかなか複雑ですが、私の心が、今、しっかりと過去とつながっていることは確かです。

「私の地域学への軌跡」のお話が長くなってしまいましたが、ここで短くまとめてみます。私が地域学に取り組むようになったのは、担当教員としての責任を果たすためであって、とても自発的といえるものではありませんでした。それでも、反発を感じつつ、私なりに「なぜ、今、地域なのか」という問いを立てて研究してきました。シンプルな問いですが、この問いから非常に重要な、根源的というべきものが見えてきたように思います。昨年度の講義原稿を読んでいただければ、その一端がわかるはずです[2]。

それから松場さんのことを紹介しましたが、それは松場さんの講演が私にそれまで見えなかったこと、見ようとしなかったこと、そして「私にとって切実な問題がどこにあるか」に気づかせてくれたからです。これは松場さんの講演に限りません。新妻弘明さんや内山節さんなど、ほかにもたくさんいらっしゃいます。「地域学入門」と「地域学総説」はそういう場なのです。ですから2回目以降の講義をとにかく集中して聴いてください。そうすれば、みなさんも人生の糧になる何かを吸収できるはずです。

[2] 柳原邦光、2017、「地域学への招待」『地域学論集』第14巻第1号。

2．関係を結び直す

次のパートに進みます。あるとき先輩の教員がポツンといわれました。「学生たちは自分の身の回り1メートルのことにしか興味がないようです」と。先生は嘆いておられたのですが、もしそうなら仕方ありません、素直にそれを認めて、「身の回り1メートル」のところから始めるしかありません。「自分の身近なところから考えるのも一つの方法だ」とポジティヴに受け止めて、具体的に考えてみましょう。

たとえば、みなさんは、今、学生として授業に参加し、私の話を聴いていますが、ここまで来るにはいくつもの条件を満たさなければならなかったはずです。それを一つ一つ列挙してみれば、みなさんの「いま、ここ」を成り立たせているものがわかります。もちろん、一生懸命受験勉強をされたことも重要な条件の1つですが、それだけではないはずです。それにみなさんは元気でここに座っていますね。元気でいるのが当然であるかのように。しかし、当たり前のことでしょうか。ご両親や周囲の人たちはみなさんの命が失われることのないように、人らしい人に育つように、ずっと配慮されてきたことと思います。

私の経験を紹介しましょう。私には娘が1人います。最愛の娘です。しかし、子どもが生まれると知ったとき、これからどうなるのか不安でした。自分のことで精一杯だったのです。出産のときも、妻が分娩室に入ったとき、ほっとして分娩室前のソファーで眠ってしまいました。しばらくして赤ちゃんの声が聞こえて、看護婦さんが娘を見せてくださいました。娘の手はハッとするほど美しかったです。無垢な小さな手を見て、私は瞬時に変わりました。「絶対にこの子を死なせてはならない、自分の命に代えても立派に育てる。」そういう覚悟がいきなり決まったのです。

こうしたことも含めて、みなさんの「いま、ここ」を考えてみてください。自分の生活がどのようにして成り立っているのか、そもそもなぜいま「命」があるのか、よくよく考えてみてください。

また私事になりますが、今のところ、真面目に働いて大学から給料をいただいていますので、なんとか生活できています。しかし、あと3年で定年退職です。退職すれば、自分の時間がたっぷりできて、それまでできなかったこともできるようになります。そう思って、定年を楽しみにしていたのですが、最近、定年後の年金支給額を知らせるはがきがきました。それによれば、年収が今の何分の1かになります。これで生活できるのか、と急に心配になってき

ました。安定しているようにみえて、私の生活基盤はとてもか細いのです。そのことを１枚のはがきが教えてくれました。

しかし、ものは考えようです。これまでを振り返ってみれば、貧乏生活から始まって再びつつましい生活に戻るのですから、どうということはないはずです。とはいえ、1 つだけ大きな違いがあります。かつての農家としての暮らしはお金だけに頼ってはいませんでした。だから何とかなったのです。となると、退職後の暮らしはどうなるでしょうか。やはり心細いことです。そんなわけで、この頃は、市民農園でも借りて野菜でもつくろうかと、妻と話しています。

このように今の自分の生活を可能にしているものから考えていけば、社会の在り方を含めて、いろいろなものがとても見えやすくなります。この点についても、昨年度の講義原稿に書いていますから、読んでみてください。

話題を変えます。私はパンづくりにはまったことがあります。先輩の先生から天然酵母からパンをつくってみないかとしきりに勧められて、生返事をしていたら、「もうつくったか、もうつくったか」と何度も聞かれたんですね。もう面倒くさくなって、やってみました。本やインターネットから情報をとってきて、ブドウやリンゴ、バナナなどを使って酵母液をつくり、すべて手作りでやったのです。そうしたら驚いたことに、おいしいパンができたのです。嬉しくなってあれこれ工夫をしていくと、ますますおいしくなって、いろいろな人に食べてもらいました。

パン職人になった気分でご機嫌だったのですが、あるときパンが膨らまなくなりました。同じ方法なのに、いきなりうまくいかなくなったのです。なぜだろうと調べて原因がわかりました。酵母が発酵するには適切な温度が必要ですが、夏から秋に季節が変わるなかで気温が適温以下になって膨らまなくなったのです。まったく些細なことですが、この経験は大変勉強になりました。

私は自分がパンをつくっていると思っていましたが、違いました。自然の力でパンになるのです。そう気づいてからは、わが家のイチジクや柿の木が小さな実をつけ、次第に大きくなり、熟していくのを見ると、そこに自然の力を感じて感動してしまいます。感謝の気持ちでおいしくいただいて、自然の恵みを実感しています。

先輩の先生はなぜあのようにパンづくりを勧めてくださったのでしょうか。先生は、パンづくりも自分にとって地域学だとおっしゃっていました。先生はもうご自身の命が続かないとわかって、自宅で最後の時を過ごしておられたときも、酵母液を使ってパンをつくられたそうです。発酵の進み方次第で、深夜にパンをつくることもあるのですが、それも厭わずされたといいます。パンづくりは神戸生まれ神戸育ちの先生にとって自然の力を感じる貴重な時間だったのかもしれないと、今は思います。

私たちの「命」と暮らしを支えているのは、結局、自然なんですね。人間は自然と様々な関係を結んで「命」をつないできたのです。そう思うと、自分の「命」も永続的なものとつながっているような気がします。もっとも、こんなことをいっている私を父親が見たら、呆れると思います。「おまえ、そんな当たり前のことに今頃気づいたのか」と。祖父はどう思うでしょうか。祖父の生涯のテーマは「自然」でした。「ジネン」というべきでしょうが、ようやく私も同じような問いをもつようになりました。どうやら祖父の後を追っているようです。

「関係を結んで生きる」ということをもう少し考えてみます。これまた先輩の教員の言葉です。「生きるとは、何かを引き受けることですね」。これも私にとって大きなヒントになりました。私は漠然と「自由でありたい」と思っていましたが、今思うと、私にとって、自由とは嫌なことや辛いことを経験しないで生きることだったような気がします。愚かなことです。この生き方を徹底したければ、あらゆる関係を断ち切ってしまえばいいのです。そうすれば不快な思いをすることはありません。しかし、これは誰とも何とも縁をもたない「無縁」状態で、死んだも同然です。生きているとはいえません。

重要なことは、逆なんですね。「生きるとは関係を結ぶこと」、あるいは「様々なものと関係を結んでこそ生きられる」ということでしょう。先輩はこのことを私にやんわりと教えてくださったのだと思います。

おわりに

私のところで歴史学の修士論文を書いた学生が、あるときこういいました。「先生が若い頃に書かれた論文と最近の論文とではまったく違いますね」と。文章も捉え方もずいぶん変化している、というのです。「ほおっ」と感心したのですが、その彼女は歴史学の論文を地域学の発想を取り入れて書きました。学会発表をし、学術論文も書きました。どちらも好評でした。特に修士論文の口頭試問では、論文を読まれた先生が、啓蒙思想にとても詳しい方でしたが、

「このような論点を提示した研究者はいない」と驚き、高く評価してくださいました。

何がいいたいのかといいますと、私も彼女も地域学から重要な何かを吸収してきたのです。「何か」とは、ここまで述べてきたことです。そして、率直に、シンプルに、考えることです。「〈命〉は様々なものと関係を結んで生きている」という気づきです。

みなさんは『地域学入門』という本を購入されたと思います。メインタイトルよりもサブタイトルの「〈つながり〉をとりもどす」に注目してください。それは「関係を結び直す」ということです。私にとって、これが地域学のエッセンスです。

それではこれで私の講義を終わります。

Ⅲ.〈私〉と地域学

はじめに

こんにちは。地域文化学科の柳原邦光です。私は歴史学が専門で、フランス革命やライシテについて研究していますが、「地域学総説」では専ら「地域学」について講義してきました。

「総説」は今年で13年目です。来年度からは必修科目「地域学総説Ａ」になります。授業回数は8回ですので、全15回の「総説」は今年度が最後です。13年間を振り返れば、始めから教員は全力疾走しました。エネルギーに満ちていました。しかし、当時の教員は私を含めて4人しか残っていません。定年退職と他大学への移動のためですが、亡くなった方もいます。もはや語ることのできない仲間のことを考えて、今日の講義は、「地域学総説」13年間の総括という意味も込めて、「地域学」のエッセンスを紹介することにします。

本論に入る前に、「総説」の目的を紹介しましょう。それは、皆さんが「地域学を自分の言葉で語れるようになること」です。そのためには、教員自身が語れなければなりません。しかし、すぐには無理でした。試行錯誤しながら経験と知を積み重ねるほかなかったのです。このような事情から、教員にとって「総説」は「地域学を創る場」となりました。

このような課題を抱えて教員は奮闘してきました。私の場合、地域学の論考を19編書きました。タイトルは「地域学総説の挑戦」と「地域学を創る」としました。当時の思いをそのまま表現したのです。教員の長年の努力は『地域学入門―〈つながり〉をとりもどす―』(ミネルヴァ書房)に結実しました。2013年度には、同じような志と構想をもっていた「日本ボランティア学会」と一緒に研究大会を鳥取大学で開催して、大きな成果を得ました[3]。

これから現時点での「地域学」を提示しますが、膨大な蓄積のなかからエッセンスと思われるものを抽出して「地域学」の形にするのはこの私ですので、「私の地域学」と理解していただければと思います。パワーポイントも資料もありません。集中して聴いてください。

１．分析枠組みとしての「地域」

実をいいますと、「地域」という言葉は私にはしっくりきません。このことを素直に認めて、「なぜそうなのか」考えてみます。

「地域学」を構想するとき、自分の経験に照らして考えるようにしています。実感を大切にしたいからです。私は島根県大田市、そのなかでも山奥の方で生まれ育ちましたので、「経験」とは農村での暮らしのことです。当時は自分の住んでいるところを「山中部落」といいました。「部落」には「東組」「中組」「南山」という「組」がありました。私は「東組」で、戸数は15軒です。「部落」の次に大きな単位は「祖式町」で、自治体ではなく、住所を示す時の名前です。

祖式町には保育園と小学校、中学校がありましたので、中学生までは町内で生活しました。経験的に「わかる」のは「東組」「山中部落」「祖式町」です。しかし、どれも「地域」とはいいませんでした。「地域」という言葉は暮らしにはありませんでした。

ついでにいえば、「里山」という言葉を最近知りました。2011年度地域学研究会大会で「里山」の話を聴いたのです。「奥山」という言葉もあるということでした。私は「里山？奥山？どこのこと？」と思いました。私の生活では「山」で十分でしたし、2つに分けることもありませんでした。自分の住んでいるところを「里」とか「里地」ということもありませんでした。

生活の言葉は具体的な何かを指していますので、「地域」もつい同じように考えてしまいますが、説明のための言葉だと割り切った方がいいようです。「何かを説明するとか、問題として検討するときに有効だから用いている」ということです。実際、総説では「地域」を「思考の道具」や「分析枠組み」と説明しています。「地域」のサイズについても、何を検討対象にするかに応じて「伸び縮みする」といいます。「東組」「山中部落」「祖式町」のような「小

[3] 柳原邦光、2015、「いのちをいただき,いのちを生かす」、『日本ボランティア学会2014年度学会誌』6‐11頁。

さな空間」もあれば、「東アジア」「環太平洋地域」など巨大な空間のときもある、ということです。理屈はともかく、私の生活感覚では理解できない、距離のある言葉です。

しかし、「地域」として語られるものをよく考えてみると、違う面が見えてきます。例を２つ紹介します。１つは、2015 年に口永良部島で火山が噴火して島民全員が屋久島に避難して１か月ばかりたったとき、一人の男性が語った言葉（テレビのニュースから筆者がメモした言葉）です。「避難暮らしをしてはじめて、島の自然、土地、人たちといかに深いつながりのなかで生きてきたのか、よくわかりました。そこから切り離されていると、自分の存在が薄れていくような気がします。生きているという感じがしなくなります。とにかく早く戻りたいです」と。

もう１つは、東京在住の作家、森まゆみさんの言葉です。森さんは地域雑誌を長い間出してこられた方です。雑誌名の『谷根千』は谷中・根津・千駄木のことですが、「谷根千」という「町」は行政上存在しません。「暮らしを大事にしたい」と思ったとき、意識に上ってきた「自分たちの町」だそうです。森さんは、様々な人々の人生や思い出がしみついた建物や風景をみると、暮らしの連続性と土地や人との関わりのなかで自分が「生かされている」と感じます。「心の落ち着き」と「癒し」を与えてくれます。そして「歴史が降り積もっているところで暮らすことは、生を豊かにしてくれます」といわれました[4]。

お二人が語られているのは「生きられた地域」です。このような感覚が「地域」の核にあるとすれば、「地域」という言葉で表現されるものには、「何か、奥の深いもの」があるように思います。

次に、フランス革命が提示した近代の諸原理を確認した上で、「なぜ『地域』という枠組みを用いるのか」、考えてみます。

フランス近代はフランス革命から始まります。革命では、真っ先に「人権宣言」を発して、新しい国家と社会を創るための大原則を宣言し確認しました。その要点を列挙してみますと、①人間は「自由」で権利において「平等」である。②幸福に生きることは普遍的な権利であり、国家の役割はそれを保障し実現することである。③ものごとを最終的に決定する権限と権威の源泉、すなわち「主権」は、「国民」にある。④「法」は「国民」の意志の現れであり、誰にも等しく適用される、です。この宣言には自明の前提がありました。人間は、知性の力で、法と諸制度と教育を通して、幸福をこの世で実現できるという確信です。

人権宣言は、「個人の意志と自由」を出発点とし、国家の目標を幸福の実現としています。人権宣言は現行の第５共和国憲法でも前文として挿入されており、現代フランスにおいても大原則です。

少し補足します。近代が目指したのは、伝統・慣習・習俗・社会関係から個人を自由にすることでした。また、「人間を超えた『聖なるもの』の感覚に支えられた宗教から人間を解放して、『個人の意志』を唯一の価値の源泉とすること」でした[5]。人々の生活を支えてきた様々な関係を「人間を縛るもの、拘束するもの」と否定して、そこから人間を引き離し、「自由な個人」にして国家とのみ関係を結ぶことにしたのです。「自由」になって同質的な存在となった個人の生活を、国家が制度で保障するというのです。

このような考え方に基づく国家を「国民国家」といいます。国民国家は明確な線を引いて国境を確定し、出入りを厳しく管理します。そして国籍をもつ者だけに生活を保障します。しかし、不安もあります。人権宣言のように、個人の自由と生活を保障すると宣言し確認し合うだけで、当時のフランスの 2800 万もの人々を１つにまとめることができるでしょうか。安定した秩序を実現できるでしょうか。この難問を解決するために期待されたのが、学校です。この点について、フランス革命史家モナ・オズーフの言葉に耳を傾けてみましょう。

> 学校はフランス革命そのものと混同される。自由で平等な個人から成る社会の崩壊を防ぎ、その苦しみを和らげることが学校に課せられる。１つの使命が与えられる。独立した個々人を生かし、ともに結びつけることのできる信仰システムの創出である。今しがたその支配を逃れたばかりの宗教には、人の心をとらえる魅力と力があった。できれば、これに匹敵するものを学校に与えて、個々人を１つに結びつけようというのである。愛国的で道徳的な共同意識をつくり鍛えあげるこのような試みに、革命家たちは断乎たる意志をもって身を投じたのだ。（中略）革命家たちは友愛の感情がもたらす全体一致の約束をキリスト教の伝統から

[4] 「小さな雑誌でまちづくり―谷根千の冒険―」（2010 年 7 月 14 日、地域学総説での講演）、「まちの暮らしに生きる歴史をみつめて―『谷根千』の実践から―」（2011 年 6 月 29 日、地域学総説での講演）。

[5] 宇野重規、2010、『〈わたし〉時代のデモクラシー』岩波書店、iv-vi 頁。

取り戻して、それとは別の、非宗教的で人間の意思を何よりも重視する伝統をつくろうとしたのである。これが国民の構築という共同の試みのなかで試されることになる[6]。

オズーフによれば、革命家たちは、「個人」と「国家」という関係のみで安定した秩序を実現しようとしました。それには誰もが「人権」と「共和国」を信じることが必要でした。人々は、学校という「信仰システム」を通して、「人権」を核とする「共同意識」をもった「国民」になるよう求められたのです。「自由」になった「個人」は、「国家」と「国民」という強固な認識枠組みをもつことを義務づけられたのです。これが近代の認識枠組みです。

近代が理想としたように、長い間生活を支えてきた様々な関係から人々を引き離して、国家が面倒をみることは、可能でしょうか[7]。すぐにわかることは、途方もない財源が必要になることです。税収の安定的増加と経済の絶えざる成長が必要です。実際には、欧米の国々は、世界システム論や従属理論が主張したように、17世紀以降、とりわけ19世紀に他の国々や地域の人々を犠牲にして世界の富を独占してきました。そのおかげで社会基盤を整備し、諸制度をつくって、国民の生活を保障することができたのです。

しかし、今は違います。先進国が世界の富を独占する時代は終わりました。経済発展を遂げる「新興国」や「途上国」との間で低価格競争を余儀なくされています。海外への工場移転や非正規雇用の広がり、社会保障の切り下げ、増税など、生活は悪化しています[8]。「先進国」でも、国家は国民の生活を保障できなくなりつつあるのです。

日本については、「地域」に着目してみましょう。この言葉は1980年代から広く用いられるようになり、地域名を冠した「地域学」や「地元学」が登場してきます。その背景には経済重視の開発が急速に進むなかで地域の豊かさや良さを見直し守りたいという願いがありました。世界が大きく変わろうとするとき、「暮らしの場を見つめて、そこから誇りとエネルギーを獲得し、一人ひとりが主体性を取り戻すための空間に変えていく試み」が始まったのです[9]。

このような動きを見ますと、地域学部が「地域」にフォーカスしたのは、国家と社会の変化にいち早く反応して、「変化の意味を問い、これからどうするのか」、「地域」から考えようとしたからだと思います。そのような志向性をもった人材を養成することに社会的な意義を見出したのでしょう。「地域」が「思考の道具」や「分析枠組み」だというのは、近代の思考の枠組みである「個人」「国民」「国家」をひとまず脇に置いて、身近なところから「一人ひとりの生」を考えようということだと私は理解しています。

２.「地域性」と「生の充実」

それでは「地域」は「私たち一人ひとりの生」にとってどのような意味をもっているのでしょうか。

「地域」の定義はいろいろありますが、ここでは文化に着目した吉村伸夫先生の定義から考えてみます。「地域とは、人間の生活をトータルにみたときに現れてくるまとまりとその空間であり、自然に働きかけて生の充実を実現する場である」[10]。この定義には重要な要素が入っています。生活と文化です。生活は「人間と自然との相互作用」に深く支えられています。「生存の確保」が大前提ですが、「地域」を「生の充実」を実現する場としています。

いうまでもないことですが、地域学は「人間の生活と自然との関係」から考える必要があります。「生きる」ためには自然にある動植物を食べるしかないからです。「生きる」ための生産技術の蓄積は文化の基盤をつくります。従って、「どうやって食べてきたのか、命をつないできたのか」を長期的な時間で考えなければなりません[11]。

---

[6] Willaime, Jean-Paul, «Etat, ethique et religion», *Cahiers internationaux de Sociologie*, Vol. LXXXVIII, 1990.

[7] フランス革命では「所有」と「労働」も「解放」されて「自由な所有」と「自由な労働」になり、人々の生存は「法」の下で確保されることになった。財産もなく、老齢で働けない人、仕事がない人など、生存が危機にさらされている人に援助の手を差し伸べるのは国家の責任とされた。波多野敏、2016、『生存権の困難―フランス革命における近代国家の形成と公的な扶助』勁草書房、113-114頁。

[8] 内山節、『半市場経済―成長だけでない「共創社会」の時代』KADOKAWA、13-20頁。

[9] 『地域学入門』22～23頁。「里山保全」という自然保護運動が始まるのも1980年代である。宮内泰介、2017、『歩く、見る、聞く　人びとの自然再生』岩波書店、31－32頁。

[10] 柳原邦光、2008、「『地域学総説』の挑戦３」、『地域学論集』第５巻第２号及び、吉村伸夫、2011、「文化現象としての地域―生の充実を求めて」、『地域学入門』参照。

[11] 佐藤洋一郎、2016、『食の人類史―ユーラシアの狩猟・採集、農耕、遊牧』中央公論社は、「生きるとはどういうことか」を「食べる」ことから考える上で大変参考になる。

次に、この定義が最も重視しているのは「生の充実」です。「生の理想」は地域によって異なるはずですから、何を「生の充実」とみるかは文化の問題です。このように考えると、地域には、「人間と自然との相互作用」をベースに様々な要素が組み合わさって形成された「文化的個性」「地域性」が存在しているといえます。地域が「生の充実」の場であるとすれば、どの「地域」も「地域性」も等しく尊重されなければなりません。

「文化的個性」や「生の充実」は、次のようなことも含みます。あるとき大阪から若い先生が赴任してこられたのですが、次第に元気がなくなってきました。聞いてみますと、「授業で学生が反応してくれません。私の講義はそんなに面白くないのでしょうか」と、実際には大阪弁でいわれたのです。「大阪人」の先生は冗談をいったり、話にオチをつけたりして、講義をされたのです。すぐに反応があると思って。ところがそうはならなかったのです。

そんなに気にしなくてもと思いましたが、立場を変えて考えてみますと、大阪人のようなやり取りを常に求められたら、私はきっと参ってしまいます。当たり前だと思っていること、こうあってほしいと望むことが、どのような地域性を身につけているかによって違うんですね。「生の充実」を目指す点では同じでも、具体的に思い描くことは違うのです。

このような「地域性」を考えるとき、藤井正先生が紹介された「地域を組み立てる様々な要素と地域のヴィジョン」（光多長温先生作成）が参考になります。「自然環境の縦軸」と「人間活動の横軸」が交差した「地域の構造図」です。「人間と自然との相互作用」をわかりやすく示した図だと思います。

構造図から２つのことがわかります。まずは１つ目です。人間は個性ある自然のなかで暮らしてきました。長い営みのなかで独自の生活技術が蓄積されるとともに、独特な振る舞い方や考え方、感じ方が生まれました。つまり、「地域性」は「人間と自然との相互作用」に深い根をもち、身体化されて、「生の充実」の重要な要素となっているのです。２つ目は、「人間と自然との相互作用」を基盤として、「地域」の「現在」を、長い「過去」の蓄積の上にあって、「未来」についてのヴィジョンを用意するものと捉えていることです。構造図は、「地域」の重要性をうまく表現しています。

ただ、構造図で十分だとは思いません。「人の移動」と「外との関係」が入っていないからです。たとえば、鳥取大学のあるこの湖山で暮らしている人々のなかには、湖山で生まれ育った人もいれば、外国人を含めてよそから来られた人もいます。他にも、様々なものが入ってきて湖山の生活は成り立っています。そう思うと、「人間と自然との相互作用」がきわめて重要だとしても、それだけでは「地域」を説明できません。もっと複雑で微妙です。変化もしているはずです。さらにいえば、地域の内と外というように明確な線があるわけではありません。説明の都合上、そういう言い方をしているだけです。

また、次のように考えることもできます。私は「東組」「山中部落」「祖式町」に住んでいました。「どれが地域か」と問われると答えられません。どれも「地域」かもしれません。そうだとすると、私が経験した、実感をともなう小さな世界には、複数の「地域」があることになります。同じことは、ゲストの高橋正雄さん（七ヶ宿水と歴史の館館長）のお住まいされているところでもいえます。何を話し合うかによって場所・組織・集団が違いました。しかも、高橋さんは外から多くの関係を受け容れて、自分たちのためにうまく活用されています。私たちはいくつもの地域と地域性を、多様な関係を結びながら生きている、と考えた方がよさそうです。

このように考えると、「地域」を明確に線引きして、単一の、閉じたものと考えるのは現実的ではありません。「地域性」といえるだけの重要な何かがあるのは確かですが、「地域」や「地域性」を変化のない、固定したものと思わない方がいいでしょう。

もう１つ重要なことがあります。「地域性」を批判的に捉えることです。「批判的」とは否定することではありません。様々な角度から検討して、正確に把握しようとすることです。ただそうはいっても、住民自身が「地域性」を客観的に認識するのは難しいことです。「文化的個性」は物事を判断するための、目に見えない「モノサシ」であり、「考えるまでもないこと」だからです。

この「当たり前」が人の暮らしを「支えて」います。しかし、「苦しめる」こともあります。異なる振る舞い方、考え方や感じ方をよしとする人もいるからです。外国から来られた人たちと日常生活を共にする時代であることを考えると、なおさらです。また、次の問題もあります。地域の「文化的個性」と、人権や民主主義など、今日、誰もが否定できない価値観との関係です。人やモノ、情報や文化が激しく移動する今日では、様々な「当たり前」がぶつかって、どう折り合いをつけるかが問題になることもあります。一人ひとりの「生の充実」を実現するには、このような点を考慮し、現実に即して工夫することが必要です。そのとき「地域性」を改めて評価する

こともあれば、見直しすることもあるはずです。

3.〈私〉から考える―関係を結んで生きるということ

ここまで「地域」「地域性」「生の充実」を中心に「地域」という分析枠組みの意義について検討してきました。これからは視点を変えて、〈私〉から「地域」を考えてみます[12]。

これから紹介するのは仲野誠先生の視点です。先生は「自分から考える地域―私がここで生きるということ―」と題して講義されたことがあります。少し長くなりますが、先生の表現に忠実にまとめると、以下のようになります。

「地域学」は「地域」という枠組で考えることを要求する。しかし、私たちは「地域」とその重要性を実感できているだろうか。それが難しいのなら、徹底的に自分の足元から考えてみてはどうか。たとえば、私は生き生きとした毎日を過ごしているだろうか。自分をかけがえのない存在だと思えるか。誰かに大切にされていると思えるか。誰かを大切にしていると思えるか。自分の胸に小さな誇りを抱いているか。もしそうでないなら、どうしたらそう思えるようになるのか。このような問いを自分の心に発してみたとき、自分を肯定できるか否かは、他者とどのような関わりをもっているか、つながりを築いているのか、という問いに行き着くのではないか。

「自立」して生きることは、通常、肯定的に語られる。しかし、本当にそうだろうか。実際には、「私の幸福」をつくる仕掛けがあるのではないか。たとえば、家族、学校、会社、地域である。このような中間集団の中で他者と関わりをもって生きることと、「私の幸福」との関係を考えるべきではないか。「私は支えられている／私は支えている」という実感が「私の幸福」の源なのではないか。「地域」とはそのような人と人との関係の一つではないのか。こうした関係を自分達の手でつくっていくことが重要なのではないか。

それには、何かを手に入れること、増やすことばかりに励むのではなく、与えること、返すこと、手放すことも考えて、関係性を構築することが必要ではないか。「地域学」とは、人生の主人公であることを貫くこと、自分の心の中に小さな誇りをもつことを確認し、新たな関係性の構築を目指すものではないだろうか。いい人生を生きたい。しかし、「人に迷惑をかけない」ではなく、「人に頼り、また人を助ける、自分が弱っても倒れない関係性」をどうやってつくるかが問題である。こうした努力をすることで、自ずと地域もよくなっていくのではないか。

これはとても重要な指摘だと思います。〈私〉の足元から考えることは難しいことではありません。誰もが〈私〉であり、「いま、ここ」があります。注目したいのは「関係性」です。「私の幸福」を他者との関係性に見ています。「他者」とは、他の人たちだけではありません。自然や土地、過去と未来を含めて、〈私〉が結んでいる関係のすべてです。他者との関係を見つめて、そこから「生きる」とはどういうことか、考えようというのです。

このような内省を通して見えてきたのは、近代的な個人、すなわち、「他者から独立した確固たる自己」ではありません。他者とつながっていて、他者を絶えず織り込みながら存在している、「開かれた存在」としての〈私〉です。それは、「他者からあなたはどう生きてきたのか、生きているのか、これからどう生きるのか」と問われる〈私〉でもあります。これが仲野先生の講義のなかで最も重要な点です。この点が分かりにくいようでしたら、前回来られた植田晃次さん（因原神楽団団長）のお話を思い出してください。苦労が多いにもかかわらず、植田さんはなぜ神楽を続けておられるのでしょうか。

仲野先生によれば、「地域」は〈私〉が結んでいる関係の1つ、生きるための具体の場です。「地域」を含めて、他者との関係を結び直すこと、新たな関係を構築していくことが、「私の幸福」と「私たちの幸福」につながる、という理解です。私は「関係を結んで生きる」、「他者と関係を結び直す」という視点を地域学に組み込みたいと思います[13]。

「関係を結んで生きる」ことについて、具体的に考えてみます。私たちは生きるために食べなければなりません。お店で食材を買って、料理して、食べています。必要なのは、お店と食材、調理道具、電気・ガス・水、食器などです。そのすべてにお金がかかりますので、働いて手に入れています。つまり、食べるという行為が成り立つためには、少なくとも「企

[12] 岸本美緒、1999、『明清交替と江南社会―17世紀中国の秩序問題』東京大学出版会の「序」は、中国史の研究ではあるが、〈私〉と「社会」との関係を考える上で大変参考になった。

[13] 内山節さんは、多様な関係をつくることは人間の本質に属し、関係をもたなくなることは人間の自己否定である。様々な関係のなかで、他者から働きかけられることによって人間は自分の存在の意味を感じとっている、と述べている。内山節、2011、『文明の災禍』新潮社、144-145頁。

業」や「役所」などの職場、「商品」とそれを手に入れるための「市場」、それから電気・ガス・水を供給する「巨大システム」、お金とその価値を保障する「国家」が必要です。私たちはこのような巨大な存在と関係を結んで食べているのです。しかし、お金がなくなったり、巨大システムが壊れたりすれば、食べられなくなります。だから、新妻弘明先生（東北大学名誉教授）は「点滴社会」といわれたのです。これが今の生活です。

しかし、かつての私の生活は違います。農家でしたので、たいていのものは自分で手に入れることができました。米と野菜は家でつくり、他の食材は家の周りに自生していました。筍、ふき、ワラビ、ゼンマイ、三つ葉、ミョウガ、セリ、お茶、ウド、クルミ、山芋などです。また、実のなる木がありました。柿、イチジク、栗、ナシ、桃、梅、スモモ、ゆず、ナツメ、ザクロです。柿は甘柿と渋柿で、それぞれ2種類、イチジクと栗も2種類ずつありました。

「自生していた」といいましたが、正確にいえば、そういう状態をつくってきたのです。食べられる物を用意しておくことは、「飢えないための」知恵なのです。「命をつないでいくこと」が最も切実な課題だからです[14]。

話を進めますと、私の家では煮炊きには山の雑木を薪にして使いました。水は山水を利用しました。ずっと流しっぱなしで、水道料金とは無縁の生活でした。食べるためにすべきことは、自分の身体を動かすことです。かつては、このような形で「自然と関係を結んで」暮らしていました。「季節の変化がわからない」ということはありえませんでした。

私の生活を「現在」と「過去」で比べれば、「関係を結んで生きる」といっても中身がまったく違います。物事の捉え方や感じ方も違っているはずです。実際、かつて「自然」という言葉を使うことはありませんでしたが、今では「自然ってなんだろう」とか、「もっと自然を感じられる生活がしたい」と思います。自然は感覚的に遠くなり、頭で考える対象になりました。

自然との関係といってもピンとこないかもしれませんが、「地域の構造図」からも明らかなように、私たちが結んでいる関係のなかで最も重要なのは、自然との関係です。問題は「どうすればこの関係とその意味をつかみとることができるか」です。

1 つ例を挙げましょう。暗闇の中でマッチを擦ったときのことを想像してください。見えなかったものがマッチの火でほんの一瞬だけ見えます。普段は「見えないもの」も「見える」ことがあるのです。自然と人間との関係についていえば、マッチは、たとえば、空港や原子力発電所の建設、阪神・淡路や東日本の大震災です。普段「見えないもの」とは、「自然と人間との関係」です。

家中茂先生が「経験される自然」として紹介された白保の海の女性のお話は、ずいぶんインパクトがありました。目の前の海に空港を建設する問題に直面して、「この海がなかったらすでに死んだ身であっただろうと、狂うほど私にとってはこの海は命の母だ、宝だ。（中略）新空港建設絶対反対。命とりの空港だ。断念せよ。断念せよ」と女性はいうのです。自然の恩恵を「命」で感じ取ってきた人には、凄まじいばかりの切実さと強い確信があるのです。判断は明確で、揺らぎはありません。

さらにいえば、自然に向き合って暮らしてきた人たちのまなざしは、遠い未来を見つめています。「きれいな海さえあれば、これまでと同じように、また1000 年間食べていくことができます」[15]。これは山口県上関町祝島のおばあさんの言葉です。祝島の住民たちは、1982 年以来、原発建設反対運動を続けています。中国電力・国・山口県・上関町の圧力に抗してです。「海のおかげで命をつないできたこと」が、揺るぎない意志を生んでいるのです。

自然との関係についてもう少し考えてみます。内山節さんは「総説」の講義で宮城県で牡蠣養殖をしている畠山重篤さんの言葉を紹介されました。畠山さんは東日本大震災の津波でお母さんと仲間、カキ養殖の関連施設などを失いました。「それでも海を信じ、海とともに生きる」というメッセージを出されました。衝撃的な言葉です。「漁師さんたちは、なぜそういえるのか」と自問して、内山さんは「津波との間に魂の次元で折り合いがついたのだろう」といいます。

つまり、こういうことです。折り合いをつけることを可能にしたのは、知性ではなくて、自然と長く関わるなかで、「身体で」受け止め学んできたことだ。「生命自体で」感じとってきたことだ。自然と向き合って暮らしてきた人々には、「身体で自然をつかんでいく、命で自然をつかんでいく」という生き方があるのではないか、それが漁師さんたちを支えてい

[14] 岡村道雄、2014、『縄文人からの伝言』集英社。特に第 2 章を参照

[15] 1982 年以来島をあげて原発建設反対運動を続けている島民たちに密着したドキュメンタリー映画『祝の島』（纐纈あや監督、2011、ポレポレタイムス社）を参照。

るのではないか。「ここには確かな関係のなかで生きてきた人の力強さ、身体で知っている確かさがある。身体は確かな自然を見ていて、やっていけるという確信をもっている」というのです。「確かさ」や「確かな関係」は、自然と向き合いながら身体を使って生活することを通して「命」の次元で獲得されるということです。同じことは、表現こそ違いますが、新妻先生もおっしゃっていました。

次に、穏やかな日常から考えてみます。群言堂の松場登美さんの言葉です。「土地の声をきく」「大地から力をいただいてものをつくっているような気がします」「土地の力に守られて今日まできたような気がします。」家についても、「家の声」、「家の力」という表現をされました。松場さんは、「土地」や「家」から何かを感じ取っているのです。不思議な、しかし、魅力的な感性です。それで、いつからそのような感覚をもたれるようになったのか、松場さんに聞いてみました。「大森町に住むようになってからです」というお答えでした。山に囲まれた大森町の自然と、400 年近い歴史のある町で暮らすことで身についた感覚のようです[16]。

これまで紹介した言葉から伝わってくるのは、人は自然とつながって暮らすことで何かを「身体で」「命で」つかみとっているということです。内山さんはそれを「確かな関係」と表現されています。

４．自然の奥深さ

自然と人間の関係について、別の角度から考えてみます。先ほど紹介した畠山重篤さんは 2008 年に『鉄が地球温暖化を防ぐ』（文藝春秋）を出版されています。この本から私が読み取ったことを紹介しましょう。

畠山さんは、「森は海の恋人」をスローガンに気仙沼湾上流の山に落葉広葉樹を植林する活動で知られています。それにはわけがありました。高度経済成長期に海の汚染が進み、牡蠣が赤潮プランクトンを吸い込んで真っ赤になったのです。売り物にはなりません。そんなとき気仙沼湾に注ぎ込んでいる「大川」の上流にダムを建設する計画が持ち上がりました。川を堰き止められては、漁師の仕事が成り立たなくなると直感した畠山さんは、フランスの有名な牡蠣養殖地であるロワール川流域など国内外の地域を視察して、重要なことを学びました。豊かな漁場となっている海には、上流に森のある川が流れこんでいることです。「森と川と海は一体であり、森が豊かな海をつくる」ことを知って、畠山さんは上流に落葉広葉樹を植える活動を始めたのです。

この認識は、漁業に関わる人たちが長い営みの中でつかみとった「経験的な知」です。しかし、この知を主張してもダム建設は止められません。行政の世界で説得力をもつのは科学的知識だからです。「森と川と海は一体である」という経験的な知を科学的に証明しなければならないのです。これは漁師にはできません。行政は「森と川と海では担当官庁や部署が違う」として相手にしてくれません。因みに、大川の管轄は宮城県土木部、山は林野庁、海と川の水質保全は環境庁（当時）、水産物は水産庁でした。ダム建設計画では海への影響は考慮されていませんでした。森と川と海を、生活と一体となったひとまとまりの「自然」として捉える発想がなかったのです[17]。科学の世界はどうか。こちらも同様で、森と川と海のメカニズムを解明する研究はありませんでした。1990 年代初めのことです。

ところが、海から生物がいなくなる現象を研究する学者がいました。畠山さんは「森と川と海が一体であること」を科学的に証明するために調査をお願いしました。先生と学生たちによる綿密な調査が行われた結果、気仙沼湾の栄養分の多くを、とりわけ鉄分を、大川が提供していることが分かりました。森が川を介して海の豊穣な生物生産を可能にし、それを人間がいただいているのです。

結果的に、ダム建設は立ち消えになりました。2008 年時点で、植樹した落葉広葉樹は約 5 万本にもなり、海ではいい牡蠣がとれるようになりました。サケが遡上し、ウナギも帰ってきました。

以上の要約から何がいえるでしょうか。畠山さんは牡蠣養殖が成り立たなくなる、生活ができなくなるという危機に直面して、あちこち視察に出かけ、「森と川と海は一体である」という「経験的な知」

---

[16] 松場登美さんのお考えについては、松場登美、2009、『群言堂の根のある暮らし　しあわせな田舎　石見銀山から』家の光協会と森まゆみ、2009、『起業は山間から―石見銀山　群言堂　松場登美』バジリコを参照。他に柳原邦光、2010、「松場登美さんの仕事に学ぶ」、『地域学論集』第7巻第1号も参照。

[17] 宮内泰介さんは次のように述べている。「奄美のご老人たちの語りに、私たちが確かなものを感じるのは、それが全体的だからだろう。（中略）私たちが回復すべきなのは、指標化された自然の『部分』ではない。回復すべきなのは、自然の『全体』であり、自然と文化と歴史、人びとの生活が一体となったその全体である。」宮内：169－170頁。

と確信を得ました。次に、「科学の知」の助けを借りて、「森と川と海は一体であること」を証明しようとしました。科学研究は重要です。しかし、研究の目的と枠組みを設定しスタートさせたのは、漁師の「切実な願い」と、「森と川と海」を「自然」として一体化して捉える「経験の知」でした。全体性をつかむ「経験的な知」と分析的な「科学の知」とを結びつけて、ダム建設を阻止しようとしたのです。

この試みとダム建設中止や豊饒な海の回復との関係については、私には判断のしようがありません。私にとって重要なのは、畠山さんの試みから「地域学の実践」について考えるヒントを探し出すことです。「地域学」は「生活の知」と「学術の知」との連携を重視しています。「地域学」がすべきことは、実際の取り組みからエッセンスを抽出して、学び、吸収して、言葉でわかりやすく表現することです。

少し私のことを話します。1988 年にパリ留学を終えて帰ってきたときのことです。飛行機の窓から日本列島が見えたとき、「帰ってきた」と安堵するとともに、「日本には山しかないのか」と思いました。パリを発ったときは、眼下に緑の平野が広がっていたのに、日本列島は山ばかりで、がっかりしたのです。

2006 年に中国東北部に行きました。飛行機からもタクシーで走っているときも、見えるのは延々と広がるトウモロコシ畑ばかりです。「こんなだだっ広いところでは暮らせない」と思いました。また、東北部はかつての満洲で、日本が統治したのですが、「それは無理だ」と直感しました。スケールが大きすぎるのです。「日本人のメンタリティーにはこぶりな自然の方がいい。」何の根拠もなく、そう思いました。

最近は、国土の 7 割近くが樹木に覆われた山であることをかけがえのない財産だと思うようになりました。山と森は雨水をため濾過してきれいな水をもたらします。また、その豊饒さで、陸でも海でも無数の「命」を支えています。

このような自然の恵みとその受けとめ方は世界のどこでも同じというわけではありません[18]。日本列島でもヨーロッパでも、人間は自然に手を加えて暮らしてきました。しかし、ヨーロッパの場合、古代ギリシャ・ローマの時代から、森は次第に失われていきました。ヨーロッパの大地は農地としてはよくありません。小麦を栽培しても収穫率が低く、生産量を増やすには畑を広げるしかありませんでした。それで目の前に広がる大森林に果敢に挑んだのです。貴族、領主、修道院を筆頭に、農民たちは大木を伐り、根を引き抜いて、畑や居住地にして、人間の支配する空間を広げていきました。11 世紀から 13 世紀のことです。近世になって人口が増加すると、産業需要を含めて大量の木材が必要になり、森はさらに失われていきました。この傾向は近代に入っても続きますが、化石燃料を使うようになり、植林活動も進んで、19 世紀後半に森林再生が軌道に乗りました。このような経験をもつヨーロッパの人たちにとって、自然は克服すべきもの、管理すべきものでした。

日本の場合、17 世紀の森林荒廃と 18 世紀以降の森林回復のように、時代や生活の仕方によって森林面積に変動がありましたが、全体的には、ヨーロッパほど大規模な森林破壊を経験することなく、森林を保ってきました。自然との関係の結び方も違います。特に農山村では、森林に手を加えながらも、「山の神」「川の神」「田の神」など、自然を、人間を超える大きな存在として捉えてきました。山は汚れた人間を浄めるところでもありました。山と森はいわば「聖なる」存在でした[19]。自然という大きな存在に包まれて生きているという感覚があったのではないでしょうか。

私たちは自然と距離のある生活をしています。しかし、大震災は目に見えないものを垣間見させてくれたように思います。それは日本列島で暮らしてきた人々が自然と向き合いながら「身体」で「命」でつかみとってきたものではないでしょうか。私たちは「目に見えるもの」の背後にあるもの、「深層にあるもの」を見つめ直すことを求められているのではないでしょうか。

それには自分の感覚に向き合うしかありません。私の場合、山には何かを感じますが、海は「怖い」です。海が見えるところで暮らしたいとは思いません。「自然」といっても、それぞれが思い描く具体的な自然は違うのでしょう。「深層にあるもの」については、どうでしょうか。

５．地域学の実践

次に「地域学の実践」について考えてみます。学外講師のお話にはいつも圧倒されてしまいます。私にはとてもできそうもないことをなさっていますし、

[18] 以下の日本とヨーロッパの森林利用については、主に斉藤修、2014、『環境の経済史―森林・市場・国家』岩波書店、第 2 章と第 3 章を参照した。

[19] 日本列島の暮らしと文化において山がもってきた根源的な意味については、町田宗鳳、2003、『山の霊力』講談社を参照。

言葉にとても力があり、吸収すべきことがたくさんあります。「すごい」と思います。

みなさんはどうでしたか。学外講師をお招きしているのは、「地域学の実践とはこういうものだ」と示すためだけではありません。お話から「何が大事なのか」を学び、吸収して、生活や生き方に活かしたい、活かしてほしいと思うからです。生活者として、誠実に人に向き合い、丁寧に生活し、真剣に仕事をすることも「実践」だと思います。松場登美さんや竹内周さん（海産加工品メーカー「井ゲタ竹内」）の活動は素晴らしいですが、出発点はここではないかと思っています。

考えていただきたいのは、「すごさ」がどこから生まれるか、です。たとえば、蛇谷りえさん（「たみ」経営）です。蛇谷さんにとって大事なのは「自分自身でいること」ですが、学校では一緒にトイレに行けなくて教室のカーテンに隠れたり、職場ではいわれた通りに仕事ができなくて困ったりしていたとき、救ってくれたのは「ものづくり」でした。アートのNPO法人でした。それでも行き詰まってしまい、「誰でもいいから関わりをもちたい、話したい」という切羽詰まった欲求から動き出して、今、人と人とをつなぐお仕事をなさっています。蛇谷さんの場合、「自分のため」と「他者のため」が無理なくつながっています。

私がいいたいのは、講師の皆さんの出発点にご自身の切実な問いや願いがあることです。自分自身を衝き動かすような切実な問いがあれば、それに従うほかありません。また、何かに出会ってしまい、やむにやまれぬ気持から動き出すこともあるでしょう。その切実さと懸命さが他の人々の協力や様々な知を引き寄せていると思います。これも「実践」です。

1つ例を挙げます。市原美穂さんの「かあさんの家」です。「かあさんの家」では、余命幾ばくもない高齢者を、普通の民家で、料理の匂いや生活音のするなかで看取る活動をされています。その基本理念は、人生の幕を閉じるとき、自分の生きてきた場所で、馴染みの人に囲まれて過ごしたいという願いに応えて、人生の最後まで生活者として生きられるよう支えることです。何よりも本人の意思を尊重し、本人が決めたことを最善としてサポートすること、家族に安心して寄り添って悔いのない看取りができる場を提供することです。市原さんは、死を自然なこととして、一人ひとりが命を最後まで生ききることが本人にとっても家族にとっても幸せなことだと考えて、「かあさんの家」というサポート体制をつくられたのです。

しかし、きっかけはまったく個人的なものでした。お母さんの深い悔恨です。お父さんは病院で亡くなったのですが、お母さんはずっと付き添っておられたにもかかわらず、病室から出されてしまい、最期に立ち会えませんでした。「お父さんには最後に伝えたいことがあったのではないか、それを受け止めてあげることができなかった」[20]という後悔にお母さんはずっと苦しまれたのです。その様子を見て、市原さんは人の最期のあり方を考えるようになったそうです。

市原さんはやむにやまれぬ気持から動き出されました。そして医療機関などの諸組織と連携し、様々な制度も利用して、地域でネットワークを構築して、最後まで人として生きられる場をつくりだされました。「命」という切実な問題を前にして何とかしたいという強い思いが、必要なことを学び、つなぎ、組み立て、実践させたのです。そうした工夫の積み重ねが地域に根を張った仕組みを実現しました。これは地域学に大きな示唆を与えるものです。いろいろな学問を学んでから問題に向き合うというよりも、「切実な問いや願い」に出会ってしまい、何とかしようとして、必要な知を探し求め、学び、吸収して、様々なものと関係を結びながら、問題に取り組むのです。

そうだとすれば、重要なことは、「切実な問いや願い」に出会ったとき、それに応じて行動できるよう備えることです。様々な知をつなぎ、人と人とをつないでいけるように、自分自身が思い描くことのできる世界を広く深くすることです。そのためには、私たちは学ばなければなりません。だからこそ学外講師として地域の実践者にお話していただいているのです。

教員の仕事は、実践者の経験のなかにあるエッセンスをつかみとり、学問的な知と組み合わせて、誰でもわかる言葉で表現して、社会に伝えることです。現場の経験によって試され鍛えられた知を回収して、磨き上げて、再び社会に戻すことです。このような「知の循環」が必要です。「入門」と「総説」を公開授業にしているのも、『地域学入門』を出版したのも、教員免許更新授業で地域学を語るのも、このようなねらいがあるからです。

もちろん、まだ十分ではありません。今後の課題は、「生存の確保」「生の充実」「他者と関係を結んで

[20] この点については、フランスの事例であるが、マリー・ド・エヌゼル、1997、『死にゆく人たちと共にいて』白水社が参考になる。

生きること」を困難にしている諸問題に気づき、それを少しでも克服する方法と、解決に貢献したいと願う人たちの意思を活かす方法について、「実践的な知」を組み立てることです[21]。地域学に具体的に期待されているのはこのような貢献でしょう。

伝えたいのは、みなさんも「知の循環」に関わっていることです。みなさんは、いわば地域学の「種」です。生活者として誠実に生きれば、種は芽を出し大きく育ちます。もしかすると、「切実な問いや願い」に出会って、いつのまにか「地域のキーパーソン」になっているかもしれません。

おわりに

今回は、〈私〉がどのような関係を結んで生きているのか、関係を結び直すのか、という観点から地域について考えてみました。直接的に関係を結んでいるのは、生活の場です。私は自然との関係が重要だと思っていますが、日々経験している自然は、日本の環境や地球環境のような、自分の目では決して捉えることのできない「大きな自然」ではありません。「小さな自然」です。感じ取ることのできる、この「小さな世界」を「地域」と考えると、自然を含めて生活がどのような関係から成り立っているか、わかりやすくなります。努力すれば何とかなりそうな気もします。また、「小さな世界」からスタートして考えた方が、大きな世界と結んでいる様々な関係もわかりやすくなります。発想に無理がないからです。

たとえば、新妻先生のお話を思い出してください。エネルギーには「自給」「流通」「戦略」の 3 種類がありました。私たちの生活に直接関わっているのは「流通エネルギー」です。大規模発電された電力、巨大システムの供給する電力です。「流通エネルギー」がなくなれば、生活そのものが成り立ちません。

しかし、先生は「自給エネルギー」を強調されました。例として挙げられたのは、薪ストーブによる火力です。なぜだと思いますか？生活に必要なエネルギーの 1%だとしても、東日本大震災のとき、寒さの中で新妻さん一家の命を支えたからです。また、薪を手に入れるために、自然をはじめ様々なものと関係を結び直すことになったからです。この暮らしを新妻先生は楽しんでおられるのです。このように「生活必需」から考えると、経済的価値や便利さからだけではわからない奥行きと豊かさが見えてくるのです。

先生は 3 つのエネルギーのいずれも否定されていません。重要なのは、それぞれが生活においてもつ関係を見極めることです。「『小さな世界』でどのような関係を結んで生活しているか」を「生活必需」から考えれば、縄文時代から現代まで「命」を支えてきた「大きな構造」がわかります。構造をつくり上げている 1 つひとつが、どのような意味で重要なのか、分かりやすくなります。先生の「地域と温泉エネルギー」の構造図はそのことを見事に示しています。「これからどうするのか」を考えるとき、とても参考になります。

「関係を結ぶこと」について、最後に地域文化学科の「東アジアプロジェクト」から考えてみます。プロジェクトが目指しているのは、地域や海外の現場で言語や文化、生活習慣などを高い壁と感じないで、一歩を踏み出せる人、そのために必要な知識と言語能力、現地感覚・現場感覚を備えた人の育成です。

プロジェクトには、中国・韓国・台湾の学生を鳥取大学に迎えて行う「東アジアプログラム」と「梨花女子大学校のためのプログラム」、それから地域文化学科の学生が海外に行く「中国プログラム」「韓国プログラム」「台湾地域調査」があります。内容的には、語学学習と地域調査とを組み合わせたプログラムと、地域調査だけのプログラムで、期間は 1 週間から 10 日間です。ほかにも海外の研究者を招いて講演会を開催して、専門的知識を獲得する機会を提供しています。中国語と韓国語の勉強会もあります。勉強会には留学生も参加して、互いに言語を教え合っています。地域文化学科から留学する学生もいます。双方の留学生を通算しますと、17 名になります。学生たちは 2 つの言語を学び合います。なかには英語を含めて 3 つの言語を学ぶ学生もいます。日本語を入れると最大 4 か国語ですから、東アジアで言葉に困ることはないでしょう。

興味深いのは、鳥取大学のプログラムでサポートされた学生たちが、自分のところで行われるプログラムではサポート役に回るなどして相互的な関係を築いていることです。語学の勉強会でも同様で、まさに「支え、支えられる関係」です。また、地域調査で互いの地域の歴史や文化を学び合ううちに、どの国にも多様な地域文化があることや国を超えた文化的な共通性もあることを感じて、いつの間にか「中国文化」とか「韓国文化」という国単位の捉え方をしなくなるようです。学生たちの日常生活は大学とその周辺という「小さな世界」ですが、東アジアの

[21] 石川県輪島市「まるやま組」の「くらし」と「つなぐ」をキーワードとした取り組みが参考になる。萩のゆき「土地に根ざした学びの場 まるやま組の活動をとおして」（2014 年 2 月 19 日、石見銀山「他郷阿部家」での講演）

学生たちと相互的な関係を結ぶことで、意識はいつのまにか東アジアという「大きな地域」に広がっているようです。

プログラムを動かしておられる柳先生ご自身も次のようにおっしゃっています。

> 私が辿ってきた道は、最初から見えていたわけではありません。その場その場で自分の常識・感覚・経験にしたがって選択してきました。私の生活と仕事の場を説明するとき、国という枠組みでは不十分だと感じます。そこで「東アジア」という地域概念を思いついたのです。ただ、「東アジア」も現在の状況を説明するために使っているだけです。活動の場が東アジアを超えた場合は、別の地域概念になると思います。私には、「地域」という概念は、国の枠組みとは違って、とても魅力的に感じられます[22]。

学生たちと柳先生から伝わってくるのは、地域という捉え方には、人を自由にするところがあることです。このような感覚は、地域を考えるとき、とても重要です。たとえば、私は地域学を次のように説明してきました。

地域学の目的は、地域という枠組みに着目して、地域の個性と歴史性を尊重しつつ、「一人ひとりの生の充実」と「誰もが人として生きやすい状態」の実現に寄与することです。地域に着目するのは、地域で具体的で直接的な関係を結んで生きているからです。しかし、この関係がどのようなものなのかは容易にはわかりません。それを知るには、「〈私〉の〈いま、ここ〉からの視点」、「生活の視点」、「歴史的視点」、「移動の視点」、「客観的・構造的視点」が必要です。そして、常に見詰め続けるべきは「命」です。地域学の究極的な目標は、「一人ひとりが命の可能性を生ききること」に貢献することです。

このような説明で悪くはないのですが、なんとなく「狭さ」「窮屈さ」を感じていました。学生たちの東アジアに広がっていく感覚と意識、柳先生の地域認識は、地域学に「伸びやかさ」を与えてくれます。これは素晴らしいことです。今後、深めていきたいと思います。

最後に、「なぜ私がここまで地域学に深入りしたのか」といえば、地域学という形で考えることに、私自身の「切実な問い」に応える何かがあるということでしょう。今回の講義は、私が地域学総説で学び吸収して、地域学として表現してきたプロセスを振り返ることになりました。

これで講義を終わります。

Ⅳ．おわりに

筆者の地域（学）との関わりも随分長くなった。1999年度の「地域研究論序説」から始めてもう20年になる。今回、〈私〉から振り返る機会をいただいて、はっきりわかったことがある。「地域とは何か？」は、すでに述べたように筆者にとって切実な問いであった。しかし、もはやそうではないということである。

筆者は、地域学総説13年間のうち3年間講義をしていない。とくに2016年度は、仲野先生の依頼ではあったが、「もう語れません」と断った。地域学をもっとじっくり再考したかったからである。2017年度に講義をしたのは、先生が逝去されたためである。誰かが代わりをしなければならなかった。語ったのは、「もう語れない」はずの古い内容である。心苦しかったが、それでもいつか誰かの役に立つかもしれないと思い、講義原稿を『地域学論集』にそのまま掲載した[23]。

2018年度は〈私〉から語るよう求められたおかげで、現在の筆者の考えを明確にすることができた。その内容については繰り返しを避けて、今回、特に大事にしたことを3点記して「おわりに」としたい。

1つは、地域学に関わってきた教員の見解を筆者の構想する地域学にしっかり組み込むことである。2つ目は、筆者自身が地域で経験し学んだことを活かすことである。学んだことは数多あるが、なかでも「地域のために」という発想のなかに潜む危険性を自覚すること、問題に直面したとき、「一人ひとり」がしっかり考え判断して、それぞれの考えをわかりやすく表現し、勇気をもって行動することである。3つ目は、講義や講演をしたときにいただいた批判や助言に応えて、地域学を修正し深めることである。たとえば、地域で生活していない人（「切実さ」を感

[22] 2018年度「地域学入門」第7回での3年生と4年生の発表（「東アジアで学ぶ」）と柳静我准教授の講義から。なお、第14回では、地域文化学科（柳ゼミ）の卒業生で、現在、貿易商社で中国語と留学経験などを活かして仕事をされている豊田成美さんが「地域学部での学びと現在の仕事」と題して講演を行った。

[23] 地域学入門の原稿は「地域学への招待」として、地域学総説の場合は「地域学講義」のタイトルで、ともに『地域学論集』第14巻第1号（2017年）に掲載した。

じていない人）が「地域を創る」と称してむやみに地域をかき乱さないようにすること、「個」を大事にすること、国家の重苦しさ、生き難さを緩和する「人々が生きるための空間」として「地域」を捉え直すこと、である[24]。

そのためには〈私〉の日常から発想する必要があった。2018 年度の講義では、常に「いのち」と「生きること」を見つめつつ、「他者」との関わりを尊重し、とりわけ「自然」・「過去」・「未来」と「関係を結んで」生活することを「地域学」のエッセンスとして語った。これは筆者自身の、生きるための指針でもある。この意味で、本稿は筆者の考える「地域学の精神」を表現したものといえるだろう。

[24] 柳原邦光、2008、「『地域学総説』の挑戦 3」、『地域学論集』第 5 巻第 2 号、同、2009、「地域学総説の挑戦 4」、『地域学論集』第 6 巻第 2 号を参照。